

## かくじのおべんと

「あつ　ちゃあ〜」

思わず言った声が大きくて、自分でもちよつと驚いた。

昼休み。みんなで机を合わせて、カバンからお弁当を取り出そうとしたんだよ。だけどさ、

「あら。また？」

横からカバンを覗きこんできたれいがが、あたしの顔をちらつと見た。少し呆れて、でも少し心配そうに。  
ふう。

「そう。まただよ」

そのままあたしはカバンを閉じて、スカートの中のポケットを探した。サイフサイフ　うん、ちよつとは余裕あるか。

「またつて、なにが？」

少しかがんだあたしの顔に、ぼわぼわしたものが

当たつて、なにかと思つたらやよいの髪。あたしのカバンとポケットを見てる　ええつと、どう説明しようかな

「なおは忘れたのですよ。お弁当を」

「え〜〜〜〜つっ!!」

れいへの答えに、声が付たつ重なつた。みゆきちゃんとかかねの声。耳が痛いよ、まったくさあ。

「そう驚かないですよ。大したことじゃないから」

そう言いながら立ち上がろうとしたあたしの手が、何かにひつかつた。

「どうして、なおちゃん？」

やよいが手首掴んでるんだ。　しょうがないなあ。

「あー　ちよつとね。自分の分までお弁当まにあわなくつて」

「お弁当？　まに合わない??」

う〜ん。あんまり言いたくないんだけどなあ

「そうですね。わかりませんよね」

なおはご両親がお忙しいとき、弟さんや妹さんの

3 かくごのおべんと

お弁当も作っているんです。でも」

ちらつ、とれいかがこつちを見上げた。ちゃんと話せてことが。わかつたわかつた。

「たまにね あるんだよ。ご飯が足りなかつたりとか。たいていはハムの残りでもパンにはさんで持つてくるんだけどお〜」

「忘れたりすると、このようになる。というわけです」  
手であたしの方指したりして、観光案内されてる気分だよ。ホント、しょうがないな。れいかは。

「れいかちゃん、やけに落ち着いてるね」

「何度もありましたから。ほら、なお。わたくしのお弁当、少し持つていきなさい」

「ああ、いつもつてわけにもいかないから、いいよ。パンでも買つてく」

さつきサイフも確かめたし、今ならまだパンも売つてるはず。そう思いながら立ち上がったときだった。

「よくないっ!」

やよいの大声といっしょに、ダンッ! と大きな音が響いた。

やよいの両手が、机の上で握りこぶし作つてる。叩いたの?

「へ?」

思わず、妙な声出しちゃつたあたしの目の前に、ちやちやな箱が出てきた。まるっこい、ピンクのお弁当箱。

「わたしのこれ、半分あげるよ」

あたしは、目を上下した。差し出されたちやちやなお弁当箱と、目の前のちやちやな顔の間を。

これは、受け取れないよね よし。

「それはさあ、お母さんが作つてくれたお弁当でしよう? お弁当作りつて、結構大変なんだから。ちゃんと感謝して食べてあげなきゃ」

「それだつたら、れいかちゃんだつて!」

「れいかは自分で作ってるんだよ。こう見えてもねだから」

「わ、わたしだって、おべんとつくらい作れるもん」

あ、あれ？ いきなり立ち上がっちゃった？

「いや、そういう話じゃなく」

「つくれるもんっつー！」

ど、どうしよう。なんかもう、あたしがひと

こと言っただけで爆発しそうな雰囲気だよ。

そう思っていたら、肩にぼん、と乗っかってきた。

「作る、言つてもなあ。そもそもやよい、料理で

きたかあ？」

あかね。思わず力が抜けそうになるよあ。

「ん、調理実習の時は、あんまりだった気がするけど」

みゆきちゃんも。ああ、やつと味方がきた感じだあ。

「せやろ？ ミソまるごとお湯にぶち込んで、溶け

へんなくとか言つてたやんか」

「さ、さすがのあたしも、それは勘弁してほしい

なあ。あ、いや。イヤだってわけじゃなくなつてね

やよいの気持ちは嬉しいよ。もちろ」

つて、気を抜いたのがよくなかつたんだよねえ。

「つく・くる・もんっつー!!」

両手を胸の前でこぶしにして、口をとんがらせて、

目にちよつと涙ためて。あゝあ。これは、だめだあ。

「はあ。わかつたわかつた。そんなに言つたら、作っ

てきてみんなで食べようよ。あたし、明日もお弁当

持つてこないどくからさ」

「ううん」

ん？

「明日じゃないよ。いま作つたげる。いま！」

「え、あ、お？」

声が言葉にならなかつた。な、なに言つてんの、や

よい？

「ふふ。それじゃ、お昼はわたくしのを分けてなん

とか持たせて、やよいさんには放課後に作つてもら

いましょう。なおも、サッカー部の練習でお腹すく  
でしよう?」

「そんなこと、できるの?」

「ええ、今日は料理部の活動もないです。家庭科  
室の使用許可は、書類さえ書いてもらえれば、わた  
くしが出せます」

目の前のやよいが、ちらっとれいかの方を見た。  
ちよつとだけ、口をとがらせてむっとした顔したけ  
ど、すぐ顔を上げて、

「よあし。覚悟してよ、なおちゃん!!」

なんか、本当に覚悟が必要な気がしてきた。

\*\*\*\*\*

「なんでこんなことになつちやつたかなあ」

放課後。サッカー部のロッカーに向かいながら、あ  
たしは途中までれいかと一緒に歩いてた。  
「不満なの? わたくしがなおに分けて、放課後に

作るやよいさんのお弁当は、なおとわたくしのふた  
りで頂く。面白いじゃない」

本当に楽しそうに言うなあ。でもさ、

「れいかには悪いと思ってるよ。いつもいつもだか  
ら。だから、今日はパンにしようと思ってたんだけ  
どなあ」

「家計を預かってるんでしょ。ありがたく頂きなさい」  
背中をぼんぼん、と叩かれて、あたしは思いつき  
りため息ついた。

れいかが言うのはわかるんだよ。あたしの事情、  
ちゃんとわかってるし。それをきちんとみんなに伝  
えてくれるし、なのにな、

「まっさか、やよいがあんな駄々っ子みたいになる  
なんてねえ」

「気がついていませんか?」

え?

あたしは、思わず足を止めた。気がついてないっ  
てなにが?

「なお、やよいさんのお弁当をいらないと言う前に、ほんの少し迷ったでしょう。やよいさんだから、もらってはいけない。そう思ったんですよね？」

「そ、そうだったっけ？」

「またそうやってごまかす。だからですよ。やよいさん、そういうところ敏感ですからね」

あゝあ、それがあ。

「断るにしても、あんな言い方したら意固地になるって、わかってたはずなんだよね」

失敗したなあ。やよいの顔見てたら、ただ断っちゃいけない気がしたんだけど

「でも、止められなかった。でしよっつ？」

ん？

「ふふふ。それで、いいじゃない♡」  
そのまま笑いながら、れいかが生徒会室の方に歩いてく。

あたしはその後ろを、しばらくぼーっと見送っちゃっ

た。なんだったんだろ、あれ。

\*\*\*\*\*

「いー ち、つと」

サッカー部の子とペア組んで、まずは柔軟。でも背中を押されながら、あたしは別のことを考えてた。

「にー いつ」

いまごろ、作ってるんだろうなあ、つて。

「さー んっ」

言い方が悪かったのは、あたしのせいだけどさ。無理させちゃうのはイヤなだけどな。あれ？

背中の手力が抜けて顔を上げた先、校舎の窓がなんでか目に入った。あれは やよい？

「しー いいいつっ?! ちよ、ちよっとなおっ!!」

「あれ？」

「『あれ？』じゃないでしょ、いきなり起き上がるないですよ!!」

7 かくごのおべんと

ああ、そっか。そうだった。

何度がゴメンして、今度はあたしが押す番。

「いーち」

ゆっくり押しして、ちょっと止めて、またゆっくり

戻して。

「にーい、っと」

それを繰り返す。いつも通り、いつも通りね。

「さーん？」

まだだ。校舎の窓の向こう、やよいが走ってる

けどおかしいな。後ろから何人もついてるみたいだ。

「なお？」

ちよつとまつてよ？ 後ろについてる子、サッカー部のユニフォーム着てるんじゃない

うん、よく見えないなあ。

「な、なお」

あれ？ なに、この声？

って、うわあッ！ あ

たし、押しつぶしちゃってるっ!!

「ご、ご、ごめんっ……」

ぱつとどいて謝ったけど、ゲホゲホいってるなあ。

ああ、悪いことしちゃった

「な、おちやあ〜ん♡」

とか思ってたなら、部長の声。なに、この悪寒！

びくびくしながら振り返ったら、部長だけじゃない。サッカー部のみんなが集まってる!!

「な、なに？」

「体力ありそうだから、今日は走り込みね。フィールドのまわりを100周っ！」

え〜っ!! っていう言いたかったけど、仕方ないかあ。

柔軟で遊んじゃってるように見えるもんね。

はあ、今日はボールなし。体力づくり、行ってこようっと。

「あ、ちよつと待ってなあ。その前に みんな、いい？」

？ なんだろ。みんなして、あたしの周りを取り囲んで

んで

んで

んで

んで

んで

「コッッ!!」

「痛い！ な、なに？ 部長におデココつつかれた？」

「なにすんのよー！」

「もう うらやましいぞ、な、おー！」

「コッッ」「うらやましいぞ、な・お♡」「コッッ」

「ちよ、ちよつとみんなまで、なによそれ」

「みんなはすぐ練習に戻っていったけど、あたしはしばらく、ぼかーんとした。」

\*\*\*\*\*

「きくたよー」

「部活が終わって着替えも済んで、あたしはそのまま家庭科室までやってきた。」

「オレンジ色の夕日のなかで、変な声出して、自分でもひどい登場だと思っけど。」

「だってさ、あのあとひどかったんだから。」

「フィールドの周りを走ってるときも、うらやましいぞー、とか声がかかるし、少しスピード落ちると、こらうらやましいの、とか。あげくの果てに、シャワーで少しくたーつとなってるときまで、あつちこつちつつきに来るんだもん。もう、なにがなにやら ええい！」

「きくたよーっ！」「」

「こつちはこつちで、応えもしないし、もう、入るぞつ。」

「やよい、お弁 うわっ!!」

「家庭科室の扉を開けた瞬間、もわっ、と白いもので目の前が見えなくなった。」

「なんか、粉っぽい 小麦粉!？」

「しーッ！」

「つて、聞き覚えのある声。でもやよいじゃなくて、れいか！」

「あまり暴れないで。あつちこつち粉がたまっちゃってますからね。」

くすくす笑い混じりの声に、ちよつとイラつとなつたけど、それじゃ、やよいはどごよ？

「そのままゆつくり歩いて。粉を舞わせないように。そう、じょうずですよ。」

踊りの稽古かつて言おうとしたけど、口開けるだけで粉っぽいからやめ。あ、粉が落ち着いてきた。ちよつと先にれいかの姿と、その下の方に人影。

でも、机にへばりついている。これ、やよい？

「寝ちゃつてる。」

「疲れたみたいですね。ね？。」

れいかの音が、いたずらっぽく響いた。

言われなくてもわかっているけど、この家庭科室の惨状を見ればさあ。

「だーから、無理しなくていい、つてのに。」

「なあ、気づいてないですよね。」

「なにが？」

「か・み。」

か・み？ か ああ、髪ね。

そう言えば、さっきからなんか指が気持ちいいなあ、って思ってたんだ。あたし、やよいの髪を、無意識になでて え!?

「そ、そうだね。気が付かなかつたよ。」

ぱつ、てあたしが両手を上げたとき、はあ、つてため息の音が、静かな家庭科室で反響した。

「やっぱり、ですか。お弁当、そこにありますよ。」

「やっぱり？ なんだかへんな言い方だけど。ああ、

これか。大きくて、ころころ丸い

「おにぎり、か。無難にきたね。」

「それだけ？」

それだけ、って ん？

よく見たら、なんか普通のおにぎりと違う。のりがおかしなつき方してる。

あ、これ

「髪の毛？」

「そう。さっきまで嬉しそうにさわってた、やよいさんの、か・み♡」



うらやましい、とか言ったんじゃないの？ やよいさんに」

あ〜。

思い出したよ。そう言えば、そんなこと言っちゃったっけ。だってやよいの髪は、ぼわぼわしてて気持ちいいだもんなあ。サッカーやってる限り、あたしはあんな髪にはできないし。

「やよいさん、なおが好きなものを作るんだ、って。みんなに わたしたちだけじゃなくて、料理部に手芸部、あなたのサッカー部の子にまで、みんなに アイディアと材料の協力お願いして回ったんですよ。みんなになんて言ったか、わかります、なお？」

サッカー部のみんなに？ なに言っ、って

『うらやましいぞ!!』

ああっ！

その瞬間、部活で言われた言葉が頭に蘇よみがえったよ。でも、ちょっと、ちょっとああ！

「み、みんなに触れ回ったわけ？ あたしが、この髪が好きだって!!」

「ふふふ。それで反論できます？」

口元おさえながら笑ってるれいかが、あたしの手元を指さして ああ、こりゃ言い訳できないや。

あたし、またやよいの髪なでてるんだもんなあ

\*\*\*\*\*

「で、どうします、なお？」

しばらく黙ってたれいかが言った。

「どうするって、なにがよ」

あたしは明日、部活にどんな顔して行けばいいのが悩んでるんだ、っていうのに。

「また、お弁当忘れちゃったら？」

ああ、そっちかあ。でもねえ、やっぱり迷惑かけるのはさあ

「そこで、『ちゃん自分で作るからいい』なんて言ったら、わたくしでもなぐりますからね」

「あ はいはい。」

「そりゃそつだ。騒ぎの大本は、やっぱりあたしなんだから」

「忘れそうなときは、みんなに頼もう かな」

「あたしが観念して言ったら、れいかがにっこり笑った。こんな笑顔できるんなら、いつもしてなさいよ。もう！」

「わたくしより、ずうつと敏感ですよ。やよいさんは だからお互い、もうちよつと言葉に気をつけましょう。ね？」

「言い過ぎはお互い様、か。そつだよね、れいか相手ならいいんだけどさ。」

「相手がやよいだどつい、れいかと同じように言っちゃうんだよね」

「わかってますよ。そんなこと♡」

「いい子なんですよね 困っちゃうくらい」

え？

「ため息が聞こえた気がして、思わず顔を上げた先には開いた扉だけ。れいかの姿はもうなかった。」

「あたしの手元には眠ってるやよい。机の上には焦げた鍋と炊飯器。まわりは小麦粉で真っ白。これ全部、あたしに一人で片付けろって？」

「そりゃ、覚悟しろとは言われたけど、さあ。」

「お弁当忘れない覚悟の方が、これより楽かもね」  
心に誓ってるあたしは、手の中のぼわぼわを気にしないことに決めた。うん。

—おしまい—